月桃（げっとう）通信 No14　2019年6月23日

石原艶子

敗戦後74年「沖縄慰霊の日」　平和はキリストの十字架の下に

心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る。平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。義のために迫害される人々は幸いである、天の国はその人たちのものである。

（新約聖書マタイ福音書5：8～10）

普天間基地にオスプレイが強行配備された2012年10月から私達は普天間基地野嵩ゲート前でゴスペルを歌い、聖書の御言葉に聴き、平和への祈りを献げてきました。そんな中で集い来るキリスト者としての絆が結ばれていきました。時に心弱りめげる時にもあの人、この人の顔が思い浮び、強められ支えられて今日まで参加することが出来ました。そんな中で神様は、神谷牧師さんを通して、私に声をかけて下さり、今日この場へと導いて下さったのです。沖縄戦の体験もなく、本土育ちの私が今ここに立ち語ることが許されるのだろうかと畏れを抱きつつも、こうして語ることが許される時が来たことに深い感慨を覚えつつ、74年という時の重みをずっしりと感じています。

敗戦後74年を迎えたこの日、沖縄戦での慰霊を沖縄から解き放ち、世界平和への祈りとして世界（地球）的な視点で戦争を知らない若い世代の人達と共に学び、共に平和を祈り、行動していくことが求められていると思います。沖縄戦の真実を知り、また沖縄のもつ歴史的な意味と役割とを客観的に見ることが大切と思うのです。

私は辺野古ゲート前での座り込み、安和の港でのダンプ土砂搬入阻止行動、嘉手納基地ゲート前でのピースアクション行動、防衛局前での抗議行動など、元気な沖縄の女性の皆様と共に叫び、もう六年も続けています。そんな活動の中から考え、教えられたことなどを分ち合いたいと思っています。

私は先日、二度、佐喜眞美術館を訪ね、丸木位里・俊夫妻の描かれた「沖縄戦の図」の前に立ちました。丸木夫妻はこの絵に「国内で唯一地上戦を体験した沖縄で、人間がどのように破壊されているかを描き、そのことをしっかり見て、戦争をしない歴史を歩んでほしい、との願いを込めた」と言われています。ここに描かれている死者達は、私だったかも知れないと思い、この地獄絵の魂たちと向き合わなくては、私はとても皆様の前に立って語ることなど出来ないと思いました。私共が故郷沖縄本島に帰って来たのは2010年の夏でした。翌年の6月23日、国際反戦沖縄集会、魂魄の塔平和コンサートに初めて参加しました。魂魄の塔の前で祈りを捧げる多くの人々の姿、お花や飲物が供えられ、線香の香が漂い、慰霊一色の空気に包まれたその場に足を踏み入れた時、「ああ!!戦争はまだ終っていないのだ」と、頭を打たれたようなあの強烈な印象を私は今も忘れることが出来ません。周囲のさとうきび畑を見渡すと、ざわわ、ざわわときび畑を渡る風の中から父、母、兄弟を呼ぶ魂たちの声なき声が聞こえてくるようでした。あの沖縄地上戦の図が生々しく蘇えり、戦争の恐ろしさに身が震えました。その後石原絹子さんとの出会いに導かれ、絹子さんの戦争体験をくり返し聴く中で沖縄戦の悲惨な地獄の実態があまりにも生々しく心に迫り、沖縄に暮す一人として強い反戦平和への思いが私の命の内に血となって流れ始めたのです。絹子さんとは同じ石原姓の姉妹のようになり、絹子さんの

「沖縄戦を語り継ぐ」の本を多くの人に紹介しました。また福岡、大阪での平和講演会にもお供しました。神様は◉殺してはならない◉隣人を自分のように愛しなさい◉喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。と語りかけて下さいます。NO WAR、戦争につながる人殺しの基地は要らない。心の底から湧き上ってくる平和への強い思いと祈りに突き動かされて座り込み、抗議行動を続けています。これは私の力ではなく、神が与えて下さる力だと実感しています。
今、世界の潮流は右傾化が進みつつあり人々は内向き不寛容、排他的となりアメリカと中国との覇権争いや貿易戦争、権力者による人権と自由への弾圧など互いの不信感を強め、謀略をめぐらし、混沌の中一触即発の戦争危機を抱えています。安倍政権は憲法9条を改悪して、アメリカに代って戦争できる国へと南西諸島のミサイル基地化を進め、辺野古新基地を民意を全く無視して強行しています。また、死の商人の国アメリカへの従属を強め、武器の「爆買い」は留まるところを知らず防衛費は6,2兆円と拡大の一途、これはすべて私達国民の税金からです。武器の爆買いをやめたら、子供達の教育や医療のために、生活保護、年金など国民のために使えるのです。私たちの税金なのに何故このことが自分事とならないのでしょうか。18歳選挙権も徴兵制への布石だと分っていながら何故、若者は自分事とならず、安倍政権を支持するのでしょうか。神を忘れた人間の欲望は止まるところを知らず、高度に進化した化学技術は途方もない世界へと人類を操り、人間を逆襲するに至りました。
人々が大切にしてきた「命どぅ宝」は脅かされ、壊され、人々は孤独となりゲーム依存、薬物依存、いじめ、暴力、自殺、殺人などが闇の中に拡大し、人々は身心を病み悪魔の手中の中で苦しみ、うめき滅びへと。人間崩壊の不幸な時代となりました。一体人はどこへ向っていくのでしょうか。祈り求めた平和と幸せはどこにいったのでしょう。戦争をやめられない人間の底知れない罪の深刻さを思い言葉を失います。動物たちは群をつくり、リーダー争いはしますが負けても決して群を殺すことはしません。人間だけが残忍に人を殺す者となり、今も戦争を繰り返し、地球は人間の罪のためにうめいています。聖書は私たちに語りかけます**「あなたがたの愛が深い知識において鋭い感覚においていよいよ増し加わり、一何が重要であるのか判別するように一」**と。今こそ私たちは目覚めなくてはなりません。私たちが今日、真に慰霊を祈るというなら、私たちは神の前で本当の敵の正体を見破り、決して闇の力、悪に加担せず、イエスキリストの十字架の旗を掲げて、光と愛の側に立たなくてはなりません。沖縄の大らかさをもって悪を容認するならば、かつてあったようにだまし、だまされる関係の中でひとつ穴に落ちて行くでしょう。ある方が言ったように、私たちは右向けと言われたら右を向き、左と言われたら左を向き、死ねと言われたら死ぬのですか。「もの言わぬ民は滅びる」のです。慰霊を語ることは、自分自身の生き方が問われることだと思います。私たちが幾百万もの魂たちの前で戦争は二度と絶対にしてはならない、NO WAR、と叫ぶなら魂たちは生き返り、私達と共に闘って下さるでしょう。そして戦争がこの世界から無くなった時、初めて、魂たちの慰霊の日が訪れるのだと思います。丸木さんの沖縄戦の絵の中で、最も悲惨なものは親子、兄弟で殺し合ったあの集団自決の地獄絵です。丸木さんは集団自決とは手を下さない虐殺だとハッキリと言っています。何故こんな惨状が起きたのか、そこに天皇を神とした皇民化教育があったことを決して忘れてはなりません。皇民化教育によってマインドコントロールされてしまった故の悲劇の実体と私たちは今、真正面から向き合わなくてはなりません。それと同時に加害者ともなった事実とも向き合わなくてはなりません。二度と同じことを繰り返さないために。それは今、この日この時に私たちは向き合わなくてはい

けないということなのです。令和制定の日、沖縄の人々はどう反応しましたか。今回、慰霊の日に読まれる「本当の幸せ」の詩の中に平成、令和が使われていることに、不安を感じるのは私だけでしょうか。沖縄からの慰霊の日のメッセージとしての発信だからこそ元号を使ってほしくなかったと思うのは私だけでしょうか。沖縄戦や特に集団自決を思えば、元号を使うことはとても出来ません。今や子供達を指導できる教師もいないのでしょうか。平和教育の危機と、再び天皇制にコントロールされる沖縄の弱さに不安を感じるのです。

イザヤは予言しました。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向って剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」（旧約聖書イザヤ書2：4～5）

イザヤは何故このように確信することが出来たのでしょうか。私はイエス・キリストの御霊がイザヤと共にあったからだと思うのです。私はこのイザヤの予言の言葉はキリストの十字架の下に成就していることを信じるものです。何故なら、キリスト御自身が平和の実存そのものなのですから。

去る5月30日、星野文昭さんは、沖縄のために闘って無実の罪で獄中44年、国家権力によって殺され逝かれました。獄中で沢山の平和への絵を描かれました。星野さんと深くかかわり支え祈り続けられた平良悦美さんは「文昭さんは沖縄の未来への夢の火種となって生きている」と言われました。権力に殺されても死なないものとは何でしょう。それこそが死なない魂、存在そのものの内にある愛、だれも奪うことの出来ない命です。イザヤの予言はキリストを通して実現している故に私たちは野嵩ゲート前で主の祈りを「御心が天に成るごとく地にも成りますように」と祈り続けているのです。敗戦後74年、今も戦争が終らない現実の中で、座り込み闘い続ける沖縄の民こそは未来への平和の火種となって次の世代を支えていくでしょう。そして世界とアジアの平和に向って用いられていくことでしょう。いついかなる試練が来ようとも私たちは平和の主なる十字架の下にひれ伏し、キリストに従い祈る一人一人としてこの慰霊の日に神の前に決意し、未来への平和の火種となりましょう。

最後に皆様にお配りしました「青い空」の歌を共に歌って終りとしたいと思います。この歌はベトナムで反戦歌として歌い続けられているそうです。青い空は核のない青い空です。広島の核爆弾、そして2011年の原発事故、今も苦しんでいる多くの人々を思い青い空を祈りましょう。2番は私が沖縄地上戦を想像して替え歌にしました。青い海は辺野古の海。この青い海に基地を造ってはいけないとの悲痛な叫びでもあります。3番は地球家族としての世界平和への夢の実現を一人一人との交流、つながりの中でつくっていこうとの決意でもあります。辺野古座り込みの現場でもうるまの友人が歌い続けて下さっていますことを、感謝しています。

① 青い空は青いままでこどもらにつたえたい　燃える八月の朝　影まで燃えつきた　父の母の兄弟たちの　命の重みをかたにせおって　胸に抱いて

② 青い海は青いままでこどもらに残したい　燃える沖縄の海　地獄の血の中で　父の母の兄弟たちの命の叫びを胸に抱いて　命どぅ宝　命どぅ宝

③ 青い空は青いままでこどもらに伝えたい　青い海は青いままでこどもらに残したい　すべての国から戦の火を消して　平和と愛と友情の命の輝きを　この固い握手とうたごえにこめて

6月21日「合同平和祈祷集会」「沖縄慰霊の日を覚えて」那覇バプテスト教会にて語ったものです。